

ねがい



ニッコウキスゲ群生地 (ほとんどの人はここまでは行きません。クマ、カモシカの楽天地で、緑の平坦に見えるところは一面クマザサです。)

撮影者 森下悦子

撮影地 群馬県 中之条町(旧六合村) 野反湖畔

本会の新しいホームページアドレス

<http://>工事中

グラフ ボランティア便り 渋川医療センター・緩和ケア病棟	2-3
悲嘆に寄り添い20年	土屋・吉本 4
私のがんとのかきあひかた ～医療、医師、自分の身体を信じて～	石井忠則 5
キャンサーギフト	吉本明美 6
ボランティアのページ 荒れ野に花を咲かせました	7
愛しい人のねがいは届きましたか?	笛木鮎子 8-9
インフォメーション・分かち合いの会・地域がんサロンの日程	10
寄付ありがとう ほか	10

渋川医療センター 緩和ケア病棟ボランティアだより 2017年2月~2017年5月

2月 節分・豆まき・鬼たいじ・・・そして 立春へ



日本一に輝いた経歴を持つ坂井さん。あいかわらず出で立ちがお若いのです。この方、お歳を取るのをお忘れになったのかも・・・夫婦でharmonyを今年も聴かせてくださいました。

3月 お琴と尺八のコラボで 日本情緒を味わう



琴の薈会のみなさまもすっかり円熟してまいりました。3期定番として出番をしっかりキープしています。演奏曲目にも幅が広がり、琴の名曲「六段」「春の海」まで聴かせてまいります。益々のご活躍を期待しております。



もう一つの 3月 尺八で ソング・・・



尺八は、まともな音が出るまでに数年かかるといわれます。星野さんは、自己流ながら始めて早30年、今や、吾妻の尺八名物演奏家でどんな曲でも吹いてしまう「天才的センス」の持ち主です。この日も、最近の歌謡曲から懐メロ、テレビ主題歌、唱歌、童謡まで、なんでも演奏しました。昨年からご出演のお弟子さんも二度目の参加で熟達の伺える演奏を聴かせてくださいました。

4月 デビュー
えがおおとどけ隊



「えがおおとどけ隊」のみなさまは今回新登場のメンバーです。地元渋川市にお住いの方を中心とするグループで、長寿会、敬老会、社会福祉施設などの慰問活動に今や引っ張りだこ状態の人気グループです。歌に踊り、多彩なパフォーマンスで観客をひきつけます。歌の歌詞に合わせ、早変わりの衣装も自分たちで調達しました。

患者さんに元気と笑顔を届けたい。一途な気持ちで熱演の30分でした。

5月 端午の節句 青空に 民謡



五月の空高く
民謡を楽しく
旭星会のみなさま
2017.5.10(水)
午後2:30~

いつもお元気な旭星会のみなさま。「安来節」(ドジョウ擲い)、奴さん踊りと、にぎやかに、そして愉快地に、日本の民謡を楽しませていただきました。



死別・悲嘆に寄り添い20年

Part 4

道々のはなし

緩和ケア病棟に入院される患者さんは、院内の他の病棟から移籍される方と他の病院からの紹介状で緩和ケア外来を経て入院される方と大きくはこの二つの方法で入院される。いずれにしても、ご自身の病名や病状についてきちんと本人に説明されていて、本人、家族同意の上での入院となる。

患者さんはご自身の病名、病状をきちんと理解した上で入院されていると書いた。私たちボランティアはそうした事柄は承知しているが、ご本人がご自分から言い出さない限り、こちらからお尋ねすることは一切ない。

散歩のお手伝いやベッドサイドでのお話し相手、ときに、将棋のお相手、お買い物に同行などが主な役割だ。一番多いのは散歩の同行介助で、自立歩行、歩行器、車椅子で散歩。ベッドごとの外出は今の病棟になってからはほとんどなくなった。人により対応の仕方は異なるが、散歩の道々、いろいろなお話しをする。まずは、空気と空とあたりの景色のことが話題だ。「室内の空気と空気が違う」という言葉はよく聞かれる。「外の空気は気持ちイイ!!」ほとんどの人の発する言葉だ。目の前の草木、花々に視線が近づくと、感嘆し、称賛する方が多い。花の持つ力はどんな美しい言葉よりも人の心を慰め、癒す力があるようだ。が、そうでもない無関心な方もいる。

利根川をはさんで対岸を走る電車に目を向け、そこから話の始まる方もおられた。「あれで、新潟の海に、子供連れで行ったよ……。当時、蒸気機関車でね、清水トンネルは長かった。ループトンネルでね……。」遠い昔の記憶が甦ったのでしょうか、お話も長いトンネルに入って行きました。

ボランティアが作った「日本庭園」の前で話を始めた方がいました。「あの水受けのそばにある“トクサ”は下駄を磨くのに使ったものだ」と言う。しかし、そのような体験を持った者がボランティアの中にもいないので話が通じません。ご家族が来てそのことを解説して下さり、ようやく話しが通じたというようなこともありました。つまり、トクサのトは砥石のトで、やすりのようにザリザリしているので、昔は、家具、建具などの木製品を磨きあげるのに使われたそうです。

二月から三月にかけ、一人のご婦人が鉢植えのお花を数鉢院内で育てていました。以前から花の栽培を趣味とし、家でも毎年、季節の花を育てては花が咲き終わると庭に下していたそうです。時節柄、フリージア、クロッカス、チューリップ、サクラソウなどでした。ご自分で水やりしていたのですが、だんだんおおごとになり、ボランティアにその役目を頼みました。引き受けたボランティアが水やりし、花を咲かせました。その花は今、病棟の庭に植えられ、育っています。

どうぞ、安心してください。

土屋



緩和ケア病棟で

個室の窓からは外の草木が見える。花が好きなHさんは調子の良いときにはホールに出て来ては大きな窓から庭を眺めるのが常だった。「綺麗だね〜。本当に良いね〜。花を見ているとほんとに気持ちが良いよ。」と、いつも声を弾ませて言ってくれた。私達も嬉しい。いつも、花造りに精を出しているメンバーにとっては尚更嬉しい言葉だった。調子の悪い日が続くと、心配になった。なかなか花を見に出て来れないHさんが気がかりだった。

雨が続くわずかな隙間時間に合羽を着て男性ボランティア2.3人が動き出した。Hさんの部屋の前にある木の枝が1本、邪魔をして外を見えにくくしていた事を以前から聞かされていたので、まず、それを切った。視界が開けた。それだけでは終わらなかった。ボランティアのSさんが、木の枝に手作りのブランコを下げ、そこにはふくろうが乗っている。ゆらゆら揺れるブランコはHさんにも大うけだった。それから亡くなるまでの間、Hさんはきっと何度も窓の外のブランコを見てくれていたと思う。ブランコに乗ったふくろうも朝に夜にHさんを無言で見つめてくれていたと思う。

大きな事は出来ないが、ささやかながら患者さんの気持ちに少しでも寄り添えるような自分達でありたいと考えている。花を一生懸命育て、手入れしてくれる人、雑草を刈り取り、庭を整備してくれる人、患者さんと散歩したり、話を聴く人…其々の役割は違っても、気持ちは同じ「患者さんが少しでも気持ち良く過ごせたら…」なのだ。

ボランティアメンバーにも高齢化は入り込み、皆、あと何年やれるかわからない。時々体調も悪くなる。改まって話し合ったことはないが各人が「もう少し、もう少し…」と思いながら今週も行き、来週の手定を組む。それで良いかな…と思う。

吉本明美



私のがんとのかきあひかた

～医療と医者と自分の命を信じて～

石井忠則（高崎市）



病歴

私の闘病体験を少しお話ししたいと思います。

私はこの五年間に六回がんの告知を受けました。この初めは平成二十四年十二月、前立腺がんを指摘されました。前立腺特異抗原（PSA）の正常値は成人で4以下ですが、私は219ありました。すぐに「がん」と分かりました。次の日病院でCT、MRI、骨シンチ、針生研をしました。結果は、骨への転移はないもののリンパに六か所の転移が見つかりました。ステージD1、余命五年が最初の被告知でした。

次の日から抗がん剤治療が始まり、今年（平成二十九年）その五年になります。現在PSAは0.01以下になっています。

翌年、平成二十五年十二月、今度は大腸がんが見つかり外科手術をすることになりましたが、人生で初めて体にメスを入れるという先生の説明に頭は動転、何をどう聞いたか記憶にありませんでした。家に帰り手渡された書類をよく読むと、13のリスクが書いてありました。

それからわずか三か月後、CT検査で肺に転移があることが分かり、胸腔鏡で切除しました。説明ではやはり大腸からの転移だということでした。九月から抗がん剤治療が始まりました。手、足の痺れ、痛み、眩暈、ふらつき、末梢神経麻痺などに苦しみながら、家族の助けを借りてどうにか抗がん剤治療を続けている最中、平成二十七年一月、右肺に再発しました。四度目の被告知でした。

忍土

抗がん剤治療をしているのにどうして?と思い悩みましたがこれは現実です。この現実を受け止めるため禅寺の山門をくぐり座禅を試みました。寺の住職はそのとき「忍土」という言葉をくれました。「忍土」とは、苦しいとき、その苦しみを苦しみとも思わない心のことだと諭すのです。たいへん難しい言葉で急には理解できません。しかし、考え方を変えればなんということはない、苦しいと思っているのは自分だけ、だったら、苦しいところを楽しいこと、自分の好きなことに変えれば今の現状はかえられる、がんは乗り越えられる、そう切り替えると目の前が開けてきました。

病院では患者 出たら健常者

がんの患者も一日二十四時間患者ではありません。がん患者として病院に行く時だけ医師の前で患者ですが、病院を後にし、家や地域で生活するときは健常者です。辛いときは泣きもする、楽しいときは大笑い、自然体なのです。

がんとの闘いは自分との闘いです。がんを克つのも自分次第、負けられないという強い気持ちが必要です。

「見えぬ木の根があればこそ 枝葉も茂れば花も咲く」
がん患者のご家族は着きすぎず離れすぎず見守る辛抱が患者を助けることになることを知りましょう。見えぬ根に。

地域がんサロンの効用

地域がんサロンぐんまの例会に毎月参加しています。行けば楽しい会話もたくさんでき、心が豊かになり、生きる力と勇気、がんを闘う力をもらいます。一度参加すると次の会が待ちどおしくなります。がん患者・家族の皆さんはどうぞおいで下さい。私はまた、笑いヨガに出かけ、大きな声で話し、大声で笑い、肺を丈夫にしています。笑いはリスクのない薬だと思えます。

私は大勢の皆様のお力に助けられ今日までできました。平成二十八年一月にがんは消えました。ところが薬を止めると、四か月後に再発、十月に手術となりました。

苦痛がなければ治癒もない

がんとの闘いは持久戦の土俵上での戦いの様相です。ひとたび土俵に上がった以上、どんなに辛い治療にも、たとえ何年かかってもがんを勝って土俵を下りたいという心境です。皆さんもそうしましょう。

体の中についての主治医は病院の医師、体の外(生活)の主治医は自分です。二人の主治医が相談し力を合わせれば必ず勝つことができるはずです。

がんの診断は誰にとっても良い知らせではありません。最大のショック、信じられないという疑念、これらは自然の感情で誰もが通る道です。病気の進行度、治るか治らないか、分からないことをあれこれ考えても心身によくありません。真正面から現実に向き合うことしかありません。

私は信じています

がんには必ず勝てる。がんを負けないという強い気持ちで私と一緒にがんを勝ちましょう!!

たった一度の人生、一日一生の気持ちで日々自身の体を大切に生きましょう!!

暗い健康人より明るいがん患者になりましょう。

最後にお願ひがあります。自分の体は自分で守る。そのため自分の体から排出されるサイン、尿(小便)を小さな便りとし、便(大便)は大きな便りと見なし、その色、匂い、形をよく見て、約一週間変調をきたしていたら病院に行きましょう。また、年に一度の健康診断は怠りなく受けることにしませんか。



キャンサーギフト

吉本明美

「がんになってから、夫婦仲が良くなった。女房のことが癪に障るどころか、ありがたくって…毎日、病院に来てもらっているのを見てるとすまなくて、ありがたくて、かわいそうで」「うんうん、そうそう…」と頷く他の患者さん達。

「こんなに苦しいならもう一掃のこと、死んじやった方が楽だ、誰かもう殺してくれと思ったことも正直ある…でも、踏みとどまらせたものは家族だった。」

「一人じゃないってことを再入院して初めて感じた。色々な人の支えがあって、今回は入院を乗り切れた。」

「明るく前向きに行こうって本気で思うんです。笑顔で過ごそう。私の方から明るくなるうって」と、泣き笑い。

がん患者さん達の声がこの部屋で響きあう。

T先生の穏やかな語り掛けが流れていく。小さな部屋では収まり切れず、隣の小部屋も開放して、30人近くの集まりが始まった。ひとりひとりの言葉が響く。様々に響き合って、流れていく。泣き笑いも混ざって、何とも人の気持ちの柔らかさが漂う時間となる。途中で院長もやってきた。多忙な時間の僅かな隙間を使って笑顔で入ってきた。「来た、来た…」と、私は内心で思い、ほっとする。参加者は思い思いの話を続けている。本音の話を院長は私の隣でじっと聞いている。タイミングを計り、参加者に院長を紹介すると、結構、驚く。「院長先生がこういう会に出てくるの〜？」と、あとで呟いた患者さんもいた。

T先生も嬉しそうだ。患者さん達にとっては、T先生はじめ、院長先生も勿論、先生と話すことは特別の事だ。医師の言ってくれる言葉はとても大事であり、影響力は絶大だ。一言で一日頑張れる。そっと手を当てて様子を診てくれたりしたら、そのことはずっと忘れず心に残る。それらが励みや慰めに繋がる。

同じように医師の悪い冗談や、そっけない対応、一方的な語り…などは、どれほど患者さんや家族にとって悲しい事であるか…

忙しくて声すらかけそびれてしまうような病棟の空気の中で、患者さんは自分の胸に色々な事をため込んでいる。今、聴いてほしいことを3日も4日も抱えていたら、気持ちはどんどん塞がっていく。

話したいことを抱えている患者さんは聴いてくれる人を求めている。そして、もう一つ、互いに話し合い、聴き合う時間があればもっと安心する。コミュニケーションは言うまでもなく話し手と聞き手の相互の関係がなければ成立はしない。どちらか一方だけでは人と人の言葉による交わりにはならないのである。

感情を持っている私たちは話しながら、聴きながら、様々な感情を体験しているわけで、そのところが相手を傷つけることなく気持ちよく進んでいけば、両者が気持ちの良いものとなる。

がんサロンは患者さんや家族の言葉を拾う場所だ。同じ癌患者であっても、それぞれ違うという当たり前を前提として、各自が自分の選択で他者の言葉を拾い、参考にし、励みとしていく。それで良いと思うし、それが良いと思っている。

入院中の歩ける患者さん達はサロンでの患者会の後、度々やって来ては色々話して下さる。外来患者さんも受診前後に立ち寄りお喋りをしていかれる。ある外来患者さんは「診察とがんサロンで話すのが自分の外来通院」と、嬉しい事も言ってお下さる。

緩和ケア病棟の患者さんも病床訪問が続くと、自然にそれが一日の流れの中の一つとなり、段々とゆったりと話ができるようになる。特別深刻な相談とか苦しい、悲しいとかの話ばかりではなく、日常の中での、心の動きだ。ちょっと感じたこと、小さな変化、好きな話、楽しいこと、小さなイライラ…そういったことを、聴く相手が居たら、言葉に紡ぐことができる。こちらも同じだ。患者さんお話を聴いて、心が動く。思いが生まれる。それをまた、言葉に乗せて、患者さんと分かち合う。この他愛のないやり取りが日常を孤独から遠ざけてくれるような気がする。こうした交わりがなかったら…?寂しいな〜と思う。人が人と繋がっていくという事は小さなことから始まるのだと、つくづく思う。

今日も、病院は忙しい。でも、T先生は毎日病棟を廻って一人一人の患者さんの身体に手を当て、ゆっくり話を聴いている。サロンにいても同じように笑顔を絶やさず、ゆっくりと話を聴いている。私は先生の横で双方の言葉のやり取りを聴かせてもらっている。切ないけど優しい時間が流れているを感じながら、その場に一緒にいる。

みんな、今日も明日も精いっぱいやっつけていこう!と、心から願う。



荒地に花咲かしよ!!

ボランティアの活躍

冬から春へ



同じ緩和ケア病棟の庭ですが、昨年の12月にはようやく一部客土ができ春に咲く花苗を植えることができました。(写真左上)のような状態でした。が、2月-3月になると同じ庭とも思えぬほどに秋に植えた花々が次々に花開いてきました。まず、フクジュソウ(右上)、パンジー(右下)チュウリップ、クリスマスローズ、これは、旧西群馬病院緩和ケア病棟にあったのを移植しました。移転に伴い移植した植物はほかにもたくさんありますが、どれだけ定着してくれることやら・・・。

また、患者さんが病棟内で育てた鉢植えの花、一足先に春の訪れを告げていました。(2月初旬撮影)患者さんの希望で、これもお庭に植えました。



愛しい人のねがいは届きましたか？



前橋市 笛木 鮎子

私には今、夫のねがいははっきりとわかります。そのねがいに導かれるように、この7年間生きてきました。むろんねがいを知ったからといって、哀しみが消えるわけではありません。けれどそれは、死別当初とは少しずつ姿を変え、辛くてどうしようもない哀しみから、会うことのできない切なさともいうべき感情へと変化してきました。この切なさや仲良く手をつないで、これからも生きていけるような気がしています。なんとなくこのまま、生から死へと迷うことなく自然のままに。切なさは愛しい人のぬくもりのように、私の心を温めてくれるのです。

「ねがい」への寄稿を依頼され、死別後の私を振り返ってみました。読んでくださるあなたに、何かお役に立つことがあればと思いつつ。

彼と死別してからの半年間は、ともかくどうしようもなかった。私は少女漫画の悲劇のヒロインのように哀しみに浸っていた。頭に浮かぶのは彼との最後の日々だけだった。それ以外何も思うことも考えることもできなかった。

現実世界においては暗い部屋の中に閉じこもっていたわけではない。洗濯掃除など日常のこまごまとした家事雑用を行い、車を運転して仕事に出かけ、休日は家庭菜園で土に触れ、朝夕散歩をしていた。職場ではたぶん過不足なく仕事をし、人に会えば笑顔で挨拶もした。しかしただそれだけだった。傍目には滞りなく日常生活を送っているように見えていたかもしれない。けれど私の生活に意味を与えるべきものが、すっぽりと抜け落ちてしまっていた。彼が居ないというだけで、これほどまでに世界の見え方は変わってしまうのかということに驚きもした。果てのない空虚、虚無の世界に紛れ込んでしまったみたいだった。

そんな無味乾燥な日常はどうしようもなく、私は暗い森をひとりさまよっていた。

客観的にはごくあたりまえの生活をしていたが、内面では全く異なる私があった。この胸の痛みを抱えたまま一生暗闇で過ごすしかないという世捨て人のような私と、早く苦しみから解放されて新たな人生を歩いていきたいという私。けれど動き出そうという気力は全く湧いては来なかった。

彼との最後の数か月のうちに、私は私の中にあつた目に見えない力、愛とか思いやりとか優しさとか心遣いとかをすべて使い果たしてしまっただけだった。その空虚感と孤独感、とてつもなく大きく私を包み込んでいた。そこから抜け出したいというよりもその悲嘆の森にひっそりと浸りながら、ひりひりとした痛みについていつまでも酔いしれていたと願っていた。新たな人生を歩き出したいという思いもなくはなかったが、そんな日が来るとは到底思えなかった。

「人間はすぐには変わらない。でも焦ることはない。毎日目の前にあることをひとつずつやっていけばいい。そのうちまた楽しみもみつかるよ」死の5日前の彼の言葉を繰り返してぶやいていた。私は目の前にあるやるべきことだけを淡々とこなしていった。

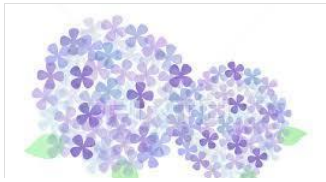
目に映るすべての物ごとの色は薄ぼんやりとかすみ、音は薄やみにとぎれて消えていった。時折ふと懐かしい匂いがしてきて優しさに包まれる。しかし瞬後にはとりかえしのつかない現実の只中に引き戻され、彼の不在に胸をしめつけられた。この世界がまた色彩に彩られることがあるのだろうか。仕事を終えて車を運転していると、遠くの山々を茜色に染める夕焼、時折その妖しいほどの色彩の妙が目映る。その美しさに惹きこまれる心がまだあることに安堵し「大自然は心



のよりどころとしてあるのだよ」死の間際に教えてくれた彼の言葉に、その真実を見た気がした。

けれどそれ以外の日常の現象すべては、仕事で得た充実感も周囲の人たちの暖かな心遣いもすべて異次元のこのように感じられ、私はふらふらと浮遊していた。毎朝目覚め仕事に行き外で活動している私と、帰宅し独り悲嘆の森をさまよう私。アパートの一室は完全に世間と切り離されていた。

このような期間が長引けばいつか私の精神は乖離してゆくのだろうか、まともな日常生活は送れなくなるのだろうか。そうなることを願っていたかもしれない。あちらの世界に入ることに何の恐れもなかった。その入り口に、いつ一步を踏み入れようかと思いつつも、彼に言われたとおり、規則正しい生活を1日1日と続けていった。そうすることしか他に何もしようがなかった。



半年が過ぎて彼の不在をどのように認識すればよいのかわからなかった。同時になぜ、生きている間は生きなければならないのかもさっぱりわからなかった。なぜ人はそれほどまでに生きていたいのか。なぜ死んではいけないのか。わからないことだらけだった。ある人には、「理由はいいません。とにかく生きて生きて生きてください」と言われた。

私の頭の中は、考えなければならないことであふれた。ふたりで生活していた時は、何も考えずとも世界は不都合なく前へ進んでいった。けれど彼の死後、私をとりまく世界、私に見える世界、踏みしめていたはずの地面さえ揺らいでしまった。この世界で生き続けるには、「考える」ということをしなければならなくなった。

自分を客観的に見つめることにまず役立ったのは、エリザベス・キューブラー・ロス『永遠の別れ』と小此木啓吾『対象喪失』である。世の中には、「死後の世界」や「死んだらどうなるか」の類の本は山ほど出版されている。また宗教まがいの様々な集まりやあやしげなグッズを売る商売などもある。それらはスピリチュアリティと呼ばれたりもしている。そういったものに救われる人もいるのだろう。けれど人は危機に陥った時、それまでの自分の考え方の枠組みから遠いものは腑に落ちない。特に科学的に実証されていないものは違和感を持つ。私がそれらの本や新興宗教に傾倒しなかったのは、やはり彼との30年に及ぶ対話から構築された考え方が、それら異質のものでは納得できなかったのであろう。

本を読むことで、私は悲嘆のさなかにいるということ、そしてこの悲嘆がどういうものなのかを知ることができた。

「喪の作業」という心理学用語は、知識としては知っていたが、自分が当事者となって初めて、どのようなものであるかが理解された。そして、自然のままにしていればよいのだ、という安心感をもたらした。

しかしそれだけでは、彼の死の意味はわからなかった。なぜ生きなければならないのか、その理由も見つからなかった。この先も「生きる」を続けるためには、もっと深く考えなければならない。そうしなければ前へ進めないと感じた私は、死別に関する研究を始めた。ここまで来るのに2年という月日が経過していた。

どうしてもやらなくてはならないことがある、というのは、悲嘆の期間をうまくやり過ごすことにつながる。生活していくための仕事、彼の死の意味を知るための研究、そして悲嘆に浸る、この3つを繰り返しながら日々過ごしていた。数年後、私は自分の問いに納得いく答えを見出した。それらを1冊の本にまとめ『死者に見守られて』と題して七回忌の記念として出版した。ここでようやく自分の気持ちに一区切りついたように思う。

死生に関する問いは、古の賢人たちが考え続けてきた難問であり、そう簡単に正解などみつかるはずはない。私自身の死の意味づけを行ったというだけである。しかしそういった自分なりの死生観を持つことは、生きることをより自由にしてくれたと感じている。

研究をしていく過程において、協力してくださった遺族の方々、医療機関の方々、研究仲間などすばらしい出会いに恵まれた。人は独りでは社会生活を営むことはできない。人と人の暖かな交流が何よりも大切であると知った。協力しあえる仲間、語り合える仲間を得たことは、彼の死がもたらした贈り物であるように思う。

こうして私は、死の誘惑から逃れ現在も何とか生きています。目の前にある自分のやるべきことをひとつひとつついで、そこに小さな楽しみを見つけながら。そういう生活を続けていると自然と感謝の気持ちがわいてきます。私の周りのすべてのものに、私を生かしてくれている何か大きな宇宙の力のようなものに。そしてその中に、彼のあたたかな視線を感じるのです。死者はみえないけれどいるのです。いつでもどこにいても何をしてもそばで見守ってくれています。それを信じていることができるので、孤独の中にもしあわせを感じることもできるのだと思います。

それにこの哀しみにも終わりがあります。運よく平均寿命まで生きたとしてもあと数十年。そうしたらまちがいに彼と再会できるのですから。その日を私は最大の楽しみとしています。それまでは、彼のねがいを胸に1日1日を丁寧に生きてゆくだけです。

あなたにもきっと
愛しい人のねがいは
届いているはずです。



“死別体験者の集い・分かち合いの会”

毎月第2日曜日

時間：14：00～16：00

場所：群馬県社会福祉総合センター

(JR新前橋駅東口から前橋寄り徒歩約5分)

☎ 027-255-6000

■誰でも予約なしに参加できます。参加費無料。

開催日	開催日	開催日	開催日
7月9日	8月13日 休会	9月10日	10月8日
11月11日 (土)	12月10日	1月14日	2月11日

地域がんサロンぐんまの開催

高崎会場 高崎市総合福祉センター3階
高崎市末広町 115-1
☎027-370-8822

開催日 毎月第3日曜日
時間 13：00～15：00

前橋会場 群馬県立図書館
前橋市日吉町 1-9-1
☎027-231-3008

開催日 毎月第4日曜日
時間 13：00～15：00

太田会場 太田市福祉会館
太田市飯塚町 1549

開催日 毎月第1日曜日
時間 13：00～15：00

富岡会場 ふれあいの居場所「よりみち」
富岡市上黒岩 1879-1
☎0274-63-7427 (和田宅)

開催日 毎月第2日曜日
時間 13：00～15：00

新町会場 自遊空間「みちくさ」
高崎市新町 2147-18

開催日 毎月第2火曜日
時間 13：00～15：00

★どのサロンも、誰でも予約なしに自由に参加できます。

インフォメーション

2017年度 ぴあサポぐんま研修会 (公開講座)

講演 エビデンスに基づく正しいがん情報

「患者のための医療、より良いがん治療とは～がんとうまく付き合っていくために～」

講師 **勝俣範之氏** がん薬物療法専門医

日本医科大学武蔵小杉病院 腫瘍内科教授

近著 “「医療否定本」の嘘” (扶桑社刊)

“「抗がん剤は効かない」の罪” (毎日新聞社刊)

入場無料 参加自由

日時 **7月8日(土)** (14時開場・14：20開演)

場所 高崎市総合福祉センター **たまごホール**

第1部 14:20～ミニコンサート “群馬おきりこみ合唱団”
第2部 15:00～

- ① 勝俣医師講演会「がんとうまく付き合うために」
- ② 勝俣医師への質問タイム (がん治療の悩みなどにお答えいただきます)

【主催】 ぴあサポぐんま

【問合せ】 090-6937-1857 (土屋)

前橋日赤 新病院

2018年(来年) 6月1日に 竣工！！

乳房再建について学び考えるサロン

日時 偶数月の第2土曜日 午後2時より

場所 開催会場が変更になりました。

新会場 群馬県立図書館

担当者 篠原敦子 090-6023-7026

詳細は上記にお電話ください。またホームページ参照情報は **シャロン前橋** で検索してください。

寄付の御礼 (2017.2～6/15日まで)

坂本義雄さま 清塚敬子さま 吉田恵美子さま
深澤順子さま 石口房子さま 細谷丈彦さま
布施裕子さま 匿名1名さま